

ミカン生育情報

千葉県
平成 28 年 9 月号

平成 28 年 8 月の気象

平成 28 年 8 月の半旬別の気象を表 1 に記した。平均気温は第 3 半旬を除く 5 半旬で平年より高かった。月平均気温は 26.0℃で、平年より 0.1℃、前年より 0.3℃高かった。

降水量は第 2、第 3 及び第 6 半旬で平年を下回り、第 2 及び第 3 半旬には降雨がなかった。第 1、第 4 及び第 5 半旬は平年を上回った。月合計は 232mm で、平年の 171%、前年の 129%であった。

日照時間は、第 2 半旬を除く 5 半旬で平年を下回った。月合計は 169 時間で平年の 78%、前年の 86%であった。

台風 9 号が 8 月 22 日に館山市付近から上陸し、農作物や園芸施設等に大きな被害が生じた。また、7 号及び 10 号が銚子沖を通過したが、直接の影響はなかった。

表 1 平成 28 年 8 月の気象 (暖地園芸研究所)

半旬	平均気温(℃)			降水量(mm)			日照時間(hr)		
	本年	平年	前年	本年	平年	前年	本年	平年	前年
1	26.1	26.0	27.9	20	18	0	31	36	58
2	27.2	26.2	27.1	0	26	0	42	36	53
3	25.0	26.3	27.1	0	25	7	29	35	39
4	26.4	26.0	25.8	75	18	98	11	35	6
5	26.1	25.8	24.7	130	17	20	18	35	32
6	25.4	25.3	22.2	7	31	56	38	40	9
平均/計	26.0	25.9	25.7	232	136	180	169	217	197

果実及び樹の生育

調査園地と暖地園芸研究所の本年度の温州ミカンの園全体の着果量は、樹によるバラツキはあるものの、早生温州、普通温州ともに平年より少ない傾向があり、早生温州でその傾向が強い。7 月終わりから 8 月前半の乾燥で強い水分ストレスがかかり、暖地園芸研究所内の着果の多い「せとか」や「はるみ」の樹では葉が巻く状態となった。また、着果の多い温州ミカンの一部の樹では果実が軟化し、葉の褪色が発生した。このため、前回調査からの肥大量は平年及び前年よりも悪い地点・品種が多かった。裏年傾向の強い地点・品種では肥大は良好であった。

暖地園芸研究所内では、果実の直射日光が当たる部分に日焼けの発生がみられ、極早生温州や「せとか」での発生が多い。また、8 月下旬以降に、温州ミカンや一部中晩柑で裂果している果実が散見された。

9 月 1 日における各調査地の果実の生育を表 2 に示した。調査地の横径、縦径の平年比は早生温州がそれぞれ、104%、101%、普通温州がそれぞれ 104%、102%と、

平年並みの生育となっている。暖地園研内の「日南 1 号」では着色が始まっている果実が見られた。

表 2 果実の生育*¹ (平成 28 年 9 月 1 日)

No.	種類・品種	調査地	横径 (cm)		縦径 (cm)	
1	興津早生	三 芳	5.6	(115)	4.6	(110)
2		千 倉	4.9	(97)	4.1	(96)
3		暖地園研	4.9	(99)	4.1	(96)
4	大津 4 号	三 芳	5.1	(103)	4.1	(101)
5		千 倉	5.3	(103)	4.1	(101)
6		暖地園研	5.5	(109)	4.1	(102)
7	青島温州	三 芳	5.1	(102)	4.2	(103)
8		千 倉	4.9	(97)	3.9	(95)
9		暖地園研	5.6	(112)	4.3	(107)
10	川野夏橙	暖地園研	7.1	(107)	6.1	(104)
11	日南 1 号	暖地園研	5.6	(97) * ³	4.4	(94) * ³
	平 均* ²	早生温州	5.1	(104)	4.3	(101)
		普通温州	5.2	(104)	4.1	(102)

() の数字は平年値 (平成 8～27 年の平均) を 100 とした比数 ※日南 1 号は 2015 年から調査

* 1 各地点の各品種の値は 40 果の平均値

* 2 早生温州 : No. 1～3 の平均、普通温州 : No. 4～9 の平均

* 3 「日南 1 号」は前年の値を 100 とした比数

病害虫の発生 (暖地園芸研究所内)

一部の樹にミカンハダニが発生している。調査樹の中では、「川野夏橙」で発生が多く果実が加害され外観が悪くなった。温州ミカンや一部中晩柑で、幼果期にカメムシに吸汁されるとみられる被害果実がみられた。

9～10 月の栽培管理

摘果

9～10 月にかけて、早生温州の樹上選果と普通温州の仕上げ摘果及び樹上選果を行う。裂果、傷果、日焼け果、腰高果、外周部の大玉果、内裾部の小玉果等を取り除き、適正着果量 (適正葉果比 : 早生温州では 30 葉に 1 果、普通温州では 25 葉に 1 果) まで摘果する。樹上選果では収穫や運搬・選果の労力を削減するため、商品価値の低い上向きの大玉果や 2 S 以下の小玉果、傷果を樹上から取り除き、果実品質を揃える。

浮皮症の軽減対策

浮皮症は着色期の高湿多湿により増加する。園地の通風を良くし、排水の点検を行い乾燥に努め、浮皮になりにくい下垂した果実を残し、上向きの大玉果を摘果する。

また、収穫前までにカルシウム剤を 20～30 日間隔で 2～3 回散布する。

病害虫の防除

果樹カメムシは園地の立地条件により飛来する量が異なる。カンキツへの加害は 9 月下旬頃から増加するとされている。加害により、落果や食べる際に果皮がむきにくくなる等の被害が出る。日暮れ頃に園を見まわり、飛来数が多い場合は、薬剤防除を行う。防除は動きの緩慢な朝方か、飛来の多い夕方に行う。

ミカンサビダニ被害が多発した園では防除を行う。この時期の被害果実は茶色～黒褐色になる。10 月までは果実を加害する可能性がある。

ミカンハダニは気温が低下し始める 8 月下旬以降に増殖する。この時期の加害は果実の外観を悪くするため、収穫期まで発生に注意し防除を行う。9 月以降の防除の目安は、寄生葉率 20%（葉 10 枚のうち 2 枚にハダニが寄生している状態）である。

ダニ類の防除の際には、農薬に抵抗性を持ったダニの発生を防ぐために、同じ系統の成分を含む殺ダニ剤の連用は避ける。

褐色腐敗病の発生が常態化している園や、発生が心配される気象条件の場合は、農薬を散布する。

青かび病・緑かび病の予防にはベフラン液剤 25（2000 倍液）※を散布する。

防除に際しては、千葉県農作物病害虫雑草防除指針を参考に行う。

※農薬の登録内容は変更になる場合があるため、農薬使用の際は最新情報を確認する。

なお、表の数値は表示単位未満を四捨五入したため、合計値と内訳の計は一致しない場合があります。

《 生育情報の問合せ先 》

千葉県農林総合研究センター 暖地園芸研究所 特産果樹研究室 電話 0470-22-2961※果樹の生育情報は「ちばの農林水産業」の「生育情報」でも御覧いただけます。

<http://www.pref.chiba.lg.jp/seisan/seiiku/index.html>